

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」9月号（通巻第4号）
2007年9月8日発行
【発行人】赤塚祐一郎
【編集人】大森美知子
【発行所】株式会社ラジオカフエ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

9

September Edition
2007, vol.4
Free of charge

この人の声が聴きたい◎8月

批評家を

内に持つ巫女

烏丸せつこさん（女優）

女優というのは職業なのだろうか、それとも余人をもつて代えがたい天賦の才能の異名というべきか。

私には、女優とはスクリーンのなかを棲家とする、なんにでも変身可能であり、どんな時代にも移動することができ、死者までも口寄せすることのできる巫女のようなものだという法外な「偏見」がある。だから彼女は、電車には乗らない。大根も刻まない。凍もかまない。うんこもしない。いやあ、なんとという素っ頓狂な「偏見」だろう。でもさ、この「偏見」なしに、女優が女優であることもまたありえないというのも真理である。巫女に信者が必要なのに、女優には私のような加担者が必要なのである。だからこそ、「女優」とは他者の意見に左右されることのない、唯我独尊の存在であることが許されている。別の言い方をすれば「わがまま」であることが許されている。

烏丸せつこという女優もまた、私のそのような「偏見」のなかに生きていた女優の一人であった。彼女は「わがまま」という風評もまた、「偏見」を裏書きしてくれていた。しかし、ラジオの収録の現場で、実際にお会いした烏丸せつこさんは、私の「偏見」をやすやすと裏切って、気の置けない、頭の良い、素敵な女性であった。人の意見をよく聴き、考え、吟味して応答してくれ、大声で笑い、ときに顔をしかめる。なんだ、普通の美しき女性じゃないか。しかし、それでもなお、彼女は「女優」であって、ほかのどんな職業も



似つかわしくないように思えたのである。この矛盾した印象を説明するのは、なかなか難しい。人はどのようにふるまえば、普通であって特別な存在になれるのか。

このたび、ラジオデイズに収録されることになった彼女の朗読のなかにその答えがあるのかも知れない。いったい、「女優」烏丸せつこは、どのように詩を読むのだろうか。「嘶家は高座から消えなければならぬ」とは、柳家小糸ん師匠から教えてもらった、五代目柳家小さんの名言であるが、詩の朗読者というものもまた、自分を消さなければ詩を消してしまうというアポリアに直面している。かつて吉永小百合が立原道造の詩を朗読しているのをテレビで見たことがあったが、そこにあるのはまぎれもない吉永小百合であって、立原はそこにはいなかった。そこで、烏丸せつこの朗読を聞いてみた。宮沢賢治、林芙美子、金子みすゞ、大手拓次、そして立原道造。そのほかにも次々に高名な詩人の作品が彼女の身体を通過して「作品」となる。なるほど、こういうことなのか。そこにあるのは「女優烏丸せつこ」ではなく、「朗読者・烏丸せつこ」であった。彼女に憑依したのは、それぞれの詩人であるというよりは、陋巷に詠うひとり「朗読者」である、というように私には思えたのである。それは、同時に女優であり批評家でもあるという稀有の才能の上には、か、実現し得ない独特の憑依の仕方であるといえるだろう。（ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美）

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWEBサイトです。飘逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみになれる魅力的なコンテンツが満載です。

9月14日(金)
ラジオデイズOPEN!
ただいま入会受付中!

いよいよ、声の魅力を凝縮したコンテンツの販売開始します。ウェブサイトではすでに入会受付中、期間中に入会いただいた会員様には、もれなく特典付、抽選で素敵なプレゼントも用意してお待ちしております。

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアローグ・シリーズをリリース！先月、小林秀雄賞を受賞された気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、錚々たるお客人をお招きして語り尽くします。最初のお相手は作家の高橋源一郎さん、題して「高橋源一郎 vs 東京ファイティングキッズ」。いまなら第一章が、無料ダウンロードできます。今後哲学者の藤田清一さん、脳科学者の養老孟司さんほか魅力的な、剣客。が続々登場です、乞うご期待！

文芸の街からは、「声の詩集」シリーズから女優の烏丸せつこさんが、うねる海のような深い声で読む『詩人の愛』I・IIをお届けします。詩に秘められた愛の行方に胸を衝かれ、知っていたはずの詩人たちの詩の言葉と新鮮な出会いを実感されるでしょう。解説は、詩人の正津勉さん。また、川端康成賞を受賞された詩人の小池昌代さん、作家の大岡玲さん、関川夏央さんなど多彩な解説者を迎えた名随筆のアンソロジー「声のエッセイ」コレクションもお楽しみください。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源をドカンと60本余をお届けします。時代に磨かれた古典を自家楽籠中に現代に演じさせる、柳家喜多八師匠や三遊亭遊雀師匠ら時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鎮を削る、三遊亭円丈師匠や柳家小糸ん師匠ら、ライブ音源だけに一期一会の嘶に出会えます。双方向の笑いの交通。なので、コンテンツフィーではなく木戸銭と考えるいただけるのでは？ まずは試聴ボタンを押して、その一端をお見せしてください。

●第5回 オリンパスシンクろ寄席

【日時】9月5日(水)午後6時45分開演(午後6時15分開場)

【場所】お江戸日本橋亭(半蔵門線 銀座三越前)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の噺を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が新作落語を二席ずつ競演します！

林家彦いち

はやしや・いち

林家久蔵に入門。平成五年、二ツ目昇進、「彦いち」と改名。一四年、真打昇進。前座時代から新作落語に取り組み、創作落語集団S.W.Aの旗揚げメンバーにもなるなど活動的。日常を独自の切り口で料理する漫談力で、この男の現れる所はいつも爆笑の渦である。



三遊亭丈二

さんゆうてい・じょうじ

三遊亭團丈に入門。平成六年、二ツ目昇進。一七年、真打昇進。「丈二」に改名。新作落語の大家・團丈門にあってひときり異彩を放つ存在で、二ツ目時代には上方修行にも赴き林家染丸の薫陶を受けた。多様な人生経験から練りだされた新作落語は必聴。



明烏い話

連載第5回



本田久作

どういわけか日本人は人前で喋る時、開口一番必ずといっていいほど「えー」と言う。噺家は人前で喋るのが商売だから、それぞれそれなりに工夫をこらしているかというところでもなく、よほどそのことにこだわりのある人(もしくはそのことに気づいた人)でなければ、どうしてもこの「えー」をやらかしてしまふ。それはそれがかまわない。ただ興味深いのは、この「えー」にも人それぞれの個性があるということである。極端に言えば、この「えー」が芸になっていく噺家となっていく。こういうのは個人的な趣味の問題でしかない。いちいちあげつらうのも馬鹿馬鹿しいことではあるが、そもそも落語について真面目に論じるといふこと自体馬鹿馬鹿しいことなのだから馬鹿馬鹿しいといふ話を続けると、私にはこの「えー」だけで魅了されてしまふ噺家が三人いて、ひそかに「えー」の御三家と名づけている。それが志ん生、三代目柳好、三代目春団治だ。もちろんこの三人以外にも味わいのある「えー」を言う噺家は何人もいる。いるけれども、とりあえずトップスリーとなるとこの三人以外私には考えられない。志ん生、柳好、春団治の「えー」はそれぞれトーンや長さが違う(春団治のは「えー」というよりは「え」である)が、共

通していることが一つだけある。彼らはこの開口一番の「えー」だけで、自分の噺家としてのキャラクターを十全に客に伝えてしまうのだ。

一丁入りか鳴り終わり、拍手が鳴りやんだ直後の志ん生の「えー」には、ほとんど志ん生のすべてがある。もちろんはじめて志ん生を聞く人には、そこまで感じることはできない。だが、繰り返し志ん生を聞いている人であれば、開口一番の「えー」を聞いた途端、志ん生の語り口や声のトーン、フラ、調子といったものが記憶の中から喚起されるはずだ。同様のことが三代目柳好と三代目春団治の「えー」についても言える。

私の記憶違いでなければ、米朝が高座での「えー」について語ったことがある。といっても、今から三十年ほど前の落語会でのことなので、米朝本人はそんなことを言ったことなど覚えていないかもしれない。私ですらその落語会が行われた場所も日時も忘れている。ともあれ、その曖昧な記憶の中の高座で米朝が「えー」について語ったのである。春団治はさすがに芸人の息子だけあって(三代目春団治の父は二代目春団治)高座で発する第一声だけお客をつかんでしまう、と。

米朝は「えー」という言葉は使わなかったが、米朝の言う「高座で発する第一声」こそ「えー」にはかならない。私がこの米朝の話をいまだに記憶しているのは、米朝の言ったことが矛盾しているとその時思ったからだ。

米朝は春団治の「えー」が魅力的なのは春団治が噺家の二世であるからだと説明した。だが、その時米朝を含む上方落語の四天王の中にはもう一人二世の噺家である六代目松鶴がいたのである。春団治が二世であるおかげで「えー」が魅力的なら、松鶴だってそうでな

ければならない。これは単純に米朝がうっかり忘れていただけだろうけれども、松鶴のことを失念させるほどには春団治の「えー」は米朝にとっても魅力的であったのだ。たかが「えー」だからといって、馬鹿にしてはいけない。ちなみに私は初代、二代目、三代目のそれぞれの春団治の「えー」の喋り分けという隠し芸を持っている。

●はたききゅうざく

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇二年の「仏の遊び」が国立演芸場日本募集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本関係の賞を毎年総ナメの業界注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本募集優秀作)、「櫻の葬式」(按摩の夢)「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀賞)など。

私の讀大ばなし 五街道雲助



き 『道灌』

噺家になって初めて稽古をもらった噺。その時分師匠は志ん生師の家二階にいたので途中から志ん生師に代わったが、三回演ってくれて三回とも内容が違っていて何とも憶えられず、また師匠に代わった。

武 『初天神』

末廣亭の余一会で師匠の独演会があり、そのときの初高座で演った噺。降りてくるとおてるさんという古参の下座さんが「とっても良かったわよ」と褒めてくれたのが嬉しかったが、その下座さんはどの前座の初高座でも褒めるのが、あとでわかった。

参 『明烏』

好きな噺。粋で、色気があって、遊び心があって、噺家が忘れてはいけないものがこの噺には詰まっている。

第6回 ラジオデイズ落語会

【日時】9月14日(金)午後7時開演(午後6時半開場)
【場所】コア石響(四ツ谷駅徒歩7分)

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は、毎回気鋭の二ツ目さんにお願ひします。

古今亭志ん五

(こんてい・しんご)

古今亭志ん朝に入門。昭和四六年、二ツ目昇進。五七年、真打昇進、「志ん五」と改名。志ん朝一門にあって与太郎噺といったらこの人、と言われるほどデフォルメされた与太郎が強烈なインパクトを与えるが、与太郎噺以外にも抱腹絶倒、聴き応えのある実力派。



三遊亭歌之介

(さんゆうてい・かうのすけ)

三遊亭圓歌に入門。昭和五七年、二ツ目昇進。六二年入門九年目にして18人抜き真打昇進。「歌之介」に改名。一度聴いたら忘れない、鹿児島生まれの独特の語り口と鋭い人間観察力を活かし、爆笑王の名をほしいままにする新作落語の旗手。



お囃子 太田その

(おわたその)

五街道弥助

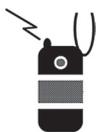
(ごかいどう・やすけ)



五街道彌助に入門。平成二年、二ツ目昇進。一七年、「弥助」と改名。先月出演した雲助師匠の一門だけあって端正な古典落語を演じることのできる本格派で、ひとたび高座にあがった行まいの美しさと骨太な芸は二ツ目のなかでも白眉。

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗③



柳亭こみち

チョコレートは修行の味、修行中はいっさい酒を飲まない。でも疲れた体は糖分を欲する。修行中は常に甘い物を食べたたくて仕方がなかった。師匠宅にお菓子が無いと、紅茶に砂糖を入れて飲んだ。お使用の途中ではチョコを買いたい。ところかまわず甘い物を口にする姿を目撃された私は、前座時代によくチョコレートの差し入れをいたしていた。

師匠宅に、ながらくお菓子が無いときがあった。な、いとよけいに食べたい。甘味を切望していたある日、台所に最中が二つ。お菓子だ！ 私は喜んで一口に食べた。しかしこの行為が、小言のもとに。「お前の食べたのはたった二つの内の一つ。たくさんあったわけでも皆の食べ残しでもない。家に最中が置かれたその日に真っ先に食うのは、居候にあるまじき行為」。私が言うのも憎越だが、たかが食べ物のことで弟子に小言を言わなければならないのは、師匠もさぞかし残念だ

ろう。毎日たらふくご飯を食べさせてくれる師匠にそんな小言を言わせてしまった、己れの愚行を恥じた。

二ツ目となり人並にお酒を飲むようになった今は、甘味に食指は動かされない。今欲しているのは差し詰め「甘い恋」。女はいつも恋に恋する生き物だ。

しかしこればかりは買えない。仕方ないわ、お菓子でも食べるか。

●りゅうてい・こなご
社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。

味な脇役・話芸の きまり文句

商い。



松井高志

以前、落語でしばしば引用される「商売というの『あきない』』という文句を、真剣に美なくちやいけない」という文句を、真剣に美容部員の教育に受け売りしている某外資系化粧品ブランドがあることを知った時はちよつとびつくりしたものであるが、「商い」にまつわる諺は、話芸にはよく出てくる。

損して得をこれ

これも見慣れた諺だが、「たとえ一時的に損をしても、それが長い目で見て追々利益になって返ってくるように按配するのが商売のコツ」との意。落語「位牌屋」に出てくる吝嗇な商家の主人は、男の子が生まれ、おめで

たいはずなのに、出産費用がかかったため渋い顔。だが、番頭に向かって、「ま、いずれこの子供が成長すれば金儲けしてくれるだろう」と言い、気を取り直す。

人を使うは使われる

これもポピュラーなビジネスの諺。「権助提灯」(三代目三遊亭小圓朝)で、本妻の「配慮」で妾宅へ泊まりに行くことになった旦那とお供の権助。権助はこき使われたうえ、寒いなか供をするのはかなわないとぼやく。これにたいし旦那はこの諺を引き、「おまえは給金を貰っているから骨が折れるのは当然。俺は使う立場だから『気骨が折れる』のだ」と言う。

人間、稼ごうと思つたら子に伏し寅に起きるくらいでなくちやいけません

講談「大岡政談」のうち「越後伝吉」より。午前零時頃に寝て四時頃に起きる。遅く寝て早く起きること。ただし、講談がごとごとく徹底的な勤勉・精励を押しつけるわけではない。「祐天吉松」(五代目神田伯龍)には、

人間の身体は使ふに度のあるものぢやから、二日や三日なら格別、長い間寝る間も寝ずに働こういふ事が出来るものではない

というちよつと「ほつとさせてくれる」文句が用意されている。

●まいつい・たかし

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『半四郎の出世・十右衛門の背後』(メタフレーション)、『人生に効く！ 話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。話芸「きまり文句」辞典「サイ」
↑ <http://wagaidom.cool.oriprivity.com/>

ラジオデイズ落語会 (毎月第2金曜)

【会場】コア石響 (四ツ谷)

【時間】午後7時開演 (午後6時30分開場)

【本戸銭】2,500円

●第6回 10月12日(金)

二遊亭遊雀 古今亭菊之丞 入船亭遊一

※ご予約申込開始は各回前月1日から、ラジオデイズ URL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話 〇三三三四一一三〇より、先着順です。

オリンパスシンクする寄席 (毎月1回不定期)

【会場】お江戸日本橋亭

【時間】午後6時45分開演 (午後6時15分開場)

【本戸銭】2,000円

●第6回 10月27日(土)

古今亭寿輔 二遊亭白鳥

※ご予約は、オフィスMs 〇三三三九九九一一三二五まで

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作、放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにストリーミング放送中です。どうぞ真夜中の語らひに耳を傾けてみてください。 <http://www.radiodays.jp>

今後の放送予定 (深夜のお客様)

9月4日 高橋源一郎 (作家)

11日 和田信平 (フレンチの料理人)

18日 美濃部美津子 (名人・志ん生の長女)

25日 柳家喜多八 (落語家)

10月2日 釈 撤宗 (本願寺派如來寺住職)

葉月の落語会ふたつ

第四回ラジオデイズ落語会 (八月一日)

は、渋いベテランと新進気鋭のガチンコ対決！ 開口一番、柳亭こみちさん「狸の札」、可愛い恩返しの子狸が印象的。続いて五街道雲助師匠が登場！ げに怖ろしき怪談も落語になると滑稽になる「お菊の皿」。皿を数えるお菊が増える見物人を意識し変わっていいところが聴きどころ。続く柳家三三師匠は「五目講釈」。お馴染み居候の若旦那が講釈師に。義士伝がなんでもありの五目講釈となる。軽快な講釈調は講釈師も顔負けの凄腕を披露。お仲入りのあとも三三師匠で「しの字嫌い」。強情で口の減らない下男と旦那の対決だ。くだらない噺を面白くできる噺家は文句なく上手い。ト리는雲助師匠、人情噺の定番「妾馬」。妹お鶴の方の男子誕生で殿様に召し出された不良だが根は善人の八五郎を、さらりとやっていて気持ちのいい「妾馬」だ。名人物や講談芝居噺を凄みの利いたキレの良さで演じきる雲助師匠、人情噺より滑稽噺が好きだというだけに、さらりとした滑稽味が光ったね！

寄席 (八月三〇日) 柳家喬太郎

登場への期待感から日本橋亭を熱気と異様な雰囲気包むなか、滝川鯉朝師匠が高座に。怯むことなく愛くるしい笑顔でゆる〜く話しはじめる。これは桃太郎、鯉昇、昇太と居並ぶ故春風亭柳昇一門のお血脈か。南千住に沈む夕陽。その叙情的な景色を見つめる「わたし、ペコちゃん」と人間たちとの交流を描く「街角のあの娘」。続くは喬太郎師匠。ある朝、ドア

を開けるとそこに石がひとつ。この不条理に男は……？ うだつの上がない独身サラリーマンの日常を襲う有り得ない出来事が、不思議な余韻を残す「いし」。期待を裏切りアツと言わせるのが喬太郎の流儀だ。お仲入りのあと、鯉朝師匠が再び登場。ペランダで煙草を喫う蝸族の隣同士、安アパートを共同で借り家庭に居場所を喪失した「お父さんの秘密基地」をつくるが結末や如何に？ トリは喬太郎師匠。窓際のサラリーマンが帰り道で勧誘の女に逢う。着いて行った男の前に怪しい教祖が現れる。ネタは「怪談のりうつり」。たしかになにかが乗り移った喬太郎師匠は、奇想天外なストーリーテラーとしても変幻自在なプレイヤーとしても、平成の天才なのだ。



オリンパスシンクする寄席の"楽屋口 (^o^)"

シンクする寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口 (^o^)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★ R (シンクする) をダウンロードしてください。

QRコード、または <http://gwmj.jp> (オリンパスのシンク★R公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先URLが記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★ R (シンクする) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクする寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るようになるのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ！

シンクする (Sync ★ R) とは？

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術に応用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

雨に濡れた新宿御苑の森が、夕日に褪せた緑を晒している。朝夕めっきり涼しくなつてややもするとセミとコオロギの声音が一緒に聞こえる。夏の名残りも台風も同時に到来だ。9月14日のオープンまでの怒涛の日々もようやく収束してきた。台風一過なるか、満を持して皆様にお届けするラジオデイズの「声」の世界に、文字どおりの百家争鳴を巻き起こせたなら、気分晴朗なんです……。

